

今回認定を受けたストーリーを紹介します



巨石を「切る」
400年前の採石作業風景(想像図)

ストーリー概要
瀬戸内備讃諸島の花崗岩と石切り技術は、長きにわたり日本の建築文化を支えてきました。日本の近代化を象徴する日本銀行本店本館などの西洋建築、また古くは近世城郭の代表である大坂城の石垣など、日本のランドマークとなる建造物が、ここから切り出された石で築かれています。

島々には、400年にわたって巨石を切り、加工し、海を通じて運び、石と共に生きてきた人たちの希少な産業文化が息づいています。世紀を越えて石を切り出した丁場は、独特の壮観な景観を形成し、船を操り巨石を運んだ民は、富と迷路のような集落を遺しました。今なお、石にまつわる信仰や生活文化、芸術が継承されています。



高さ約100メートルの断崖となっている、笠岡市・北木島の丁場



本島・高無坊山の石切丁場跡。切り出されても使用されなかった残念な石ということで、「残念石」と呼ばれています。



大坂城の石垣の一部には、丸亀の島の石も使われています



島の人の崇拜と祈りの対象となってきた、土庄町の重岩



1930年頃の石の積み込み風景



400年前の採石技術を目の当たりにできる、小豆島・岩谷地区の丁場

令和元年度 日本遺産認定証交付



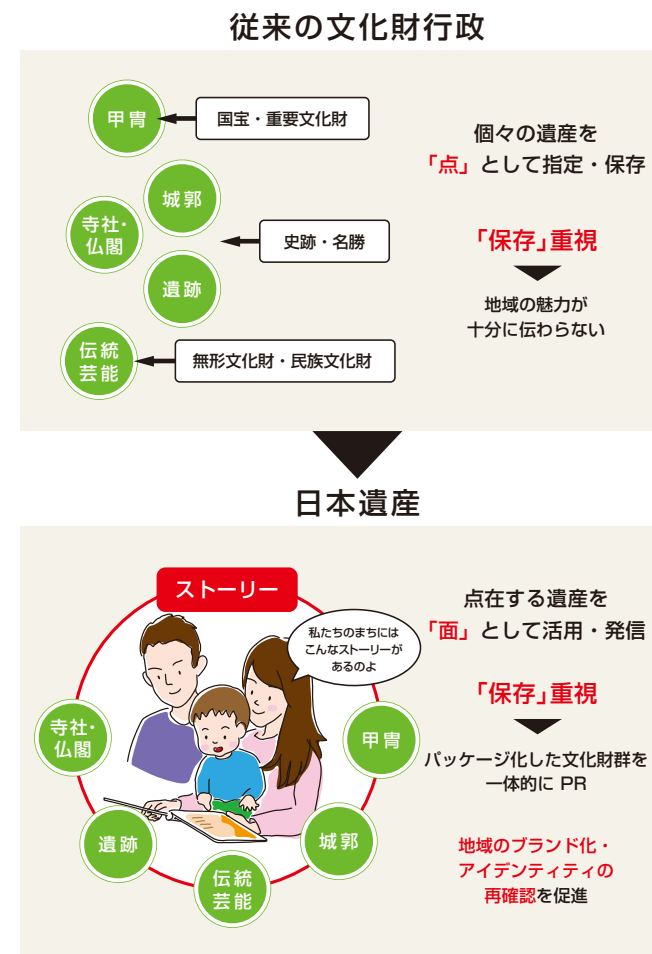
祝!
日本遺産認定

知ってる!? 悠久の時間が
流れる石の島

～海を越え、日本の礎を築いた
せとうち備讃諸島～

丸亀市・笠岡市・土庄町・小豆島町が共同で申請していた、瀬戸内海の備讃諸島をテーマにした「石の島」の物語(ストーリー)が、5月20日、見事日本遺産に認定されました! 今月の特集では、その物語を紹介するとともに、認定された日本遺産を今後どう生かしていくかを考えます。

写真左から小豆島町の松本町長、笠岡市の小林市長、土庄町の三枝町長、丸亀市の梶市長



日本遺産とは
地域の歴史的魅力や特色を通じて文化・伝統を語る「ストーリー」にまとめたものを、文化庁が「日本遺産」として認定するものです。認定されれば、ストーリーを語る上で不可欠な、魅力ある有形・無形の様々な文化財群を総合的に活用する取り組みを、文化庁が支援してくれます。2015年に始まり、これまでに四国遍路などが認定を受けています。

世界遺産とは違うの?
「日本遺産ってあまり聞いたことがないけど、世界遺産の縮小版?」と思う人が多いかもしれませんが、そうではありません。

「世界遺産」は遺産に価値を付加し、保護することを目的としています。が、「日本遺産」は地域に点在する遺産を「面」として活用し、発信することで、地域活性化につなげることを目的としています。

ストーリーを重視している
日本遺産の申請者は、全国の市町村です。各自治体(単独または共同)で文化・風習・伝統などからひとつのストーリーを作り、それに関する文化財、遺跡、名勝地、祭りなどをパッケージ化します。審査はストーリーを基準に行われ、ストーリーの興味深さ、斬新さ、地域性など、独特の基準があります。